

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652132

研究課題名(和文) 海外長期研修経験を有した高校教員の英語教育指導法改善への寄与に関する実証的研究

研究課題名(英文) Investigation on Contribution of Overseas In-service Training to High English Teachers' Teaching Practices

研究代表者

岡崎 浩幸 (OKAZAKI, HIROYUKI)

富山大学・人間発達科学部・准教授

研究者番号：20436801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、英語教員の長期派遣者がどのような研修を受け、経験をいかに現場に活用してきたか、また、還元を妨げていたのは何かを明らかにし、今後の海外研修のための示唆を得ることである。その結果、研修内容には概ね満足し、帰国後使命感をもち、現場への還元にも取り組もうとするものの、得られた経験が他の英語教員のために十分に還元できていないことが明らかになった。還元を妨げていたのは「成果と現場とのギャップ」「研修への理解者不足」「還元機会の欠如」であった。今後の研修については「帰国後サポート体制」「英語教員への還元」「事前の目標設定」が研修成果を広げていくために必要であることも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study investigates what English teachers learned from a six month program, how they applied their acquired knowledge to their Japanese contexts, and what inhibited the English teachers from applying insights from their experience to their home contexts. The results suggest the majority of the English teachers are positive about the overseas in-service training program but do not firmly believe that the experience gained are solely contributed to their professional development. Factors which inhibited effective implementation of their experience to their home school contexts included the gulf between their gained knowledge and the local contexts, the lack of support from other teachers during the implementation of knowledge, and lack of opportunities to make meaningful contributions. Components which could be improved in future program include a support system after the program and more opportunities for returning teachers to contribute.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：海外長期研修 中高英語教員 研修成果還元 授業改善 教員ライフステージ

1. 研究開始当初の背景

文部科学省は 1988 年～2009 年頃まで約 20 年にわたって「各地域において英語教育を推進する中核的教員を育成するため、優れた研究課題を有する者を海外に派遣し、英語教育に関する指導力の向上等を目指す」目的で 4300 人以上の英語教員を長期(6 ヶ月、1 年間)派遣していた。しかし、海外長期派遣者が英米の大学で得た言語習得理論・授業教授法が日本の教育現場にどのように活用・還元されてきたのかに関する調査研究はこれまでほとんど実施されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英米等の大学で得られた海外長期研修者の英語能力や指導力を再活用して、授業改善を実効的なものにする事である。該当する派遣者は、全国で約 1200 名に上る。1200 名の点在する人材を、ネットワーク化し、線から面に広げるシステムの構築を図ることを目指す。

3. 研究の方法

【海外長期派遣英語教員活用の現状】・【研修者の授業改善への意欲】をアンケートやインタビューで把握し明らかにする。次に【研修者の活用範囲】【活用内容】を洗い出し【活用のシステムを構築】する。その【システムの妥当性・実行可能性】を検証する。

4. 研究成果

23, 24 年度の研究成果として、日本の教育現場への応用という面では課題はあるが、ほとんどの派遣者は研修内容に満足しているようである(表 1, 2 参照)。しかしながら、他の教員への成果還元については約半数の教師は十分に還元できたとは思っていないという結果を得た(表 3, 4 参照)。また帰国後研修を継続している教員は約半である(表 5)。

表 1 研修内容への満足度

研修内容	平均	%
1. 聞く話す力の向上	3.39	84.8
2. 読む書く力の向上	3.31	82.8
3. 教授法	3.06	76.5
4. 教授法運用	2.67	66.8
5. プレゼン力の向上	2.61	65.3
6. 報告書(小論文)	3.23	80.8

表 2 研修内容の有用感

	平均	%
1. 聞く力の向上	3.39	84.8
2. 話す力の向上	3.42	85.5
3. 読む力の向上	3.06	76.5
4. 書く力の向上	3.28	82.0
5. 異文化理解	3.69	92.3
6. 教授法	3.08	77.0
7. 教授法の授業への運用	2.92	73.0
8. プレゼン力向上	2.67	66.8
9. 英語教師の成長	3.58	89.5

多くの海外長期研修派遣者は還元の使命感をもっていたものの、研修成果と現場のギャップ、現場における研修成果への理解者の欠如、還元機会の欠如が還元を妨げていた主な原因であることが明らかになった。

表 3 他の英語教員への還元

内容	平均	%
1. 英語使用頻度	2.83	70.8
2. リスニング指導	2.47	61.8
3. スピーキング指導	2.67	66.8
4. リーディング指導	2.58	64.5
5. ライティング指導	2.50	62.5
6. 機器を用いた指導	1.67	41.8
7. 補助プリント	2.25	56.3
8. テスト作成の考え方	2.36	59.0
9. 定期テスト内容	2.33	58.3
10. 実力テスト	2.06	51.5
11. 指導計画の考え方	2.42	60.5
12. 校内教師の研修会	2.78	69.5
13. 公的講習会発表・講師	1.60	32.0
14. 自主講習会発表・講師	1.69	33.8

*13, 14 は 5 件法(0=なし、1=研修後 1 回実施、2=研修後 2 回実施、3=研修後 3 回実施以上、4=研修後毎年)である。

表4 県全体への還元意識

	人数	%
1. 強くそう思う	4	11
2. 大体そう思う	16	45
3. あまり思えない	13	36
4. 全く思えない	3	8

表5 研修後の研修継続状況

	%
1. 研修機会ほぼ毎年参加	5.9
2. 研修機会ときどき参加	52.9
3. 自主的な研修会実施	17.6
4. 校内の授業研究充実	38.2
5. 学会等で発表	26.5
6. 小中高の教員と連携	20.6
7. 研修会で講師・発表	14.7
8. 公的私的研修会への積極的参加	52.9
9. 英語教育関係雑誌の購読	58.8
10. 自分の英語力維持	44.1

よって海外長期研修者の経験知識を今後活用していくためには、帰国後の振り返りや還元を実施するための事後研修の必要性、帰国後の還元に適した勤務環境整備、市や県主催の発表会開催や研修講師の任務付与が不可欠であることが分かってきた。

今後各種研修の成果を広げるための改善の案は以下の通りである。

1. 派遣者は、常に授業を公開する。県・市の教育委員会は、その旨を他校の教員に通知し、他校教員が研修として参観したり授業の悩み等を相談したりできる体制を確保する。

2. 派遣者は教員向けの研修会を年に複数回企画・運営する。派遣団体はその準備委員会を最初に立ち上げて、派遣教員を集め徐々に派遣教員の企画・運営に委譲する。派遣者のアイデアで自ら講師を努めて研修会を実施する。

3. 派遣者のための事後研修会は派遣団体

が最初に立ち上げて、派遣教員 OB で企画・運営していく。研修内容は学んできた知識や成果の振り返りや現場への活用・還元方法を探求する。

4. 出発前に、帰国後の業務・任務の義務づけや還元方法を明確にしておくのが望ましい。

5. 派遣団体や勤務学校は人事異動の側面で、派遣者の成果を生かすことを業務にできるようなポジションに派遣者を配置することが望ましい。

最終年度(25年度)の研究では、長期研修派遣者を現場に埋もれさせるのではなく、長期研修を通して獲得した、英語教師としての専門的成長や経験、知識をより効果的に還元活用する「新しいライフステージと新しい職能の創設」として、「教職人生の成長の視点をもっと強化すること」「職能制の視点から教員の本来の業務を見直すこと」「メンター制度・ミドル教員の育成など新たな職能制度を整理する時代に入ってきていること」「キャリアの複線化など新たな教員人生の仕組みを構築すること」の提言を行った。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

岡崎浩幸、加納幹雄、海外長期研修経験を有した英語教員の成果の還元に関する研究、日本教科教育学会誌、査読有、第36巻 第3号、2013、pp 37-47

加納幹雄、岡崎浩幸、英語教員の海外研修成果の還元を教員ライフステージに位置づける方策に関する研究、中部地区英語教育学会紀要、査読有、第43号、2014 pp59-64

〔学会発表〕(計5件)

岡崎浩幸、加納幹雄、海外長期研修経験を有した英語教員の指導法改善に関する研究、日本教科教育学会 38 回全国大会、東京学芸大学

加納幹雄、岡崎浩幸、海外長期研修経験を有した英語教員の指導法改善に関する研究，第43回中部地区英語教育学会富山大会，富山大学

6．研究組織

(1)研究代表者

岡崎 浩幸 (OKAZAKI, Hiroyuki)
富山大学・人間発達科学部・准教授
研究者番号：20436801

(2)研究分担者

加納 幹雄 (KANO, Mikio)
岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授
研究者番号：70353381